

大津 透・桜井英治・藤井讓治・吉田 裕・李 成市編

『岩波講座 日本歴史』

第六卷 中世一

岩波書店 二〇一三・一二刊

A5 三二〇頁 三三〇〇円

本書は、二〇一三年より全二十二巻の刊行が予定されているシリーズの内の一卷で、一九九〇年代の『日本通史』の刊行から凡そ二十年を経た、待望の一冊である。中世編は全四巻が刊行されており、十一世紀後半の後三条親政期から、十六世紀前半の織田信長入京前後を対象としているが、本書は承久の乱頃までを扱う計九本の論文を掲載している。以下、本書の構成と内容を紹介する。

中世史研究の課題と時期区分について論じた桜井英治氏の巻頭論文「中世史への招待」に続き、本郷恵子氏「院政論」では、流動的で模索の段階にあった院政が、男系直系相統や京都社会の身体感の変化等を背景に、次第に政治制度として成立していく過程を論じている。特に「官司請負制」を再検討することで、公家政権の中世的体制への移行を論じている点が注目される。次に武家勢力の形成過程を論じる川合康氏「治承・寿永の内乱と鎌倉幕府の成立」が所載される。院や朝廷のもとで源平軍事貴族が武力を行使するあり方を、伝統的武士社会と位置付け、頼朝が併存する軍事貴族を一元化した事が、伝統的武士社会の克服であったと説

く。次の高橋典幸氏「鎌倉幕府論」は、鎌倉幕府論の指標となってきた「東国国家論」「権門体制論」の再検討を論じる。鎌倉幕府の本質は、内乱期の軍事組織にあり、さらに朝廷との外交が幕府の構造を規定していたと指摘する。鎌倉佐保氏「荘園制と中世年貢の成立」は、荘園の国家的性格と、私的領有としての側面を明確にしながら、各荘園の実態を重視した荘園制成立過程を論じる。荘園整理令が臨時課税の強化政策であったとし、私領の形成や荘園の領域支配の強化、寄進を促進したという視点も注目される。次に地域社会論から中世武士団の成立を論じる高橋修氏「武士団と領主支配」が所載される。東国の武士団は、私領主が「地主職」を得て公的な性格を帯びたことによって同族意識が強化され、村落内部の領主層を組み込み成立したと論じる。武士団の成立によって多発した私戦を調停し武士団を統合したのが京武者であったとする。次に中世前期の村や百姓の成立過程を検討した鈴木哲雄氏「中世前期の村と百姓」は、中世の村や構成員の多面的な側面と平等性、開放性を論じる。中世百姓の自由を「請作」の視点から論じ、中世王権による一国平均役の負担者となることによって、中世百姓が成立したとする。上島享氏「鎌倉時代の仏教」は、鎌倉新仏教論や顕密体制論にみられる「正統」と「異端」という二項対立的な図式を問題視し、遁世僧を中世仏教思想の基準と位置付け、中世仏教の重層性を論じている。続いて、中世前期の文化を文学・美術・芸能から総体的に論じた坂井孝一氏「中世前期の文化」は、王権との関わりから文化の諸相を説く。これまであまり取り上げられなかった音楽や蹴鞠を論じている点が注目される。

桜井氏は巻頭論文において、六〇年代以降の多面性を論ずる研究や、社会史の旺盛に対する揺り戻しから、政治史・国家史へと
いう流れが起きていると説く。そのため権門体制論の影響が大き
くなり、荘園制や武士論等中世史の諸テーマが、この枠組みの中
で論じられていることが課題であるとする。この視点は、本書の
諸論文に一貫して見られ、各テーマから課題の克服が試みられて
いる。これまで中世史研究を規定してきた理論を再検討し、新し
い研究の方向性を示す一書となっている。

(大澤 泉)